

2024.10.13 開催 生涯研修【自由】抄録

1. 講師：高瀬 直（たかせなおき） 先生

演題：「今こそ知りたい！デジタル技工とアナログ技工の守備範囲、適応範囲」

- ・従来法より高精度？IOS フルデジタル技工のエビデンスと実際
- ・どこまで詰めればいい？正解のないクラウンの咬合
- ・IOS と上手に付き合う勘所

「フルデジタル、楽だしすごく高精度でとても良いよ！」

「デジタルはまだまだアテにならないよ、頼り切るのは不安だなあ」

なかなか意見の分かれるところだと思います。

実際、どうなのでしょう？

治療成果の良し悪しを、定量的に評価する方法があるのでしょうか。

そこで当講演ではデジタル技工とアナログ技工の守備範囲、適応範囲をテーマとし、エビデンスと臨床の両面からデジタル技工を検証したいと思います。

2. 講師：平栗 扶美（ひらくりふみ）先生

演題：「大野の台形法（Trapezoidal analysis）受け継いだ原理原則と発展」

宮城県白石市白山デンタルラボラトリー総義歯研究所の歯科技工士故）大野健夫先生がご考案された、通称“大野の台形法”は、人工歯排列のガイドラインとして認知され、今日では冠補綴やステント、インプラントなど義歯技工だけでなく様々なシーンで活用されている。

大野の台形法は、さかのぼること 30 年前の 1994 年、大阪大学歯学部有床補綴科の野首教授らの招致で「シンメトリーな咬合床の作り方」として、公式に発表されたことに始まっている。その後さまざまな改良を重ねられ、今日に至るまで実に 30 年。普遍的な理論として、技工士や歯科医師に受け継がれ、現在では海外にも理論が伝わり、好評を得ている。

これらのことから、エビデンスに基づいた台形法は、総義歯学の古典である Dr. ギージー、Dr. ゲルバー理論に続き、日本の Dt. 歯科技工士が生んだ誇り高き、模型分析法であると確信している。

大野の台形法といえば義歯製作に携わる東北の歯科技工士であれば一度は耳にしたり、実践をされておられる方も多いと推察するが、今回はあらためて、故人大野先生を偲び台形法を習った弟子のひとりとして、台形法の原理原則をさらいなおし、私が 18 年臨床で実践してきた気づきなどを共有したいと考えている。

（一社）秋田県歯科技工士会